

〔科目名〕 現代企業論	〔単位数〕 2 単位	〔科目区分〕 専門科目
〔担当者〕 藤 井 一 弘 FUJII Kazuhiro	〔オフィス・アワー〕 時間: 初回の授業時に提示 場所: 608号室	〔授業の方法〕 講義
〔科目の概要〕 現代社会において企業活動の重要性は非常に大きい。多くの人々にとって、企業は、そこで働くことによって生活の糧を得る場であり、そこから供給される製品やサービスを購入することによって、日々の生活のほとんどと言ってもよい部分が成り立っている。さらに、科学技術の発展の少なからぬ部分が、企業における研究・開発活動によって担われている。反面、企業活動が、温暖化ガスの増加に象徴される地球環境問題の大きな原因ともなっており、また企業活動の浮沈(特に沈下)によって、地域社会の衰退が引き起こされたりすることがあるのも、紛れもない現実である。 このように、私たちの生活に大きな影響を与えている「現代企業」とは、どのような存在なのか？ないしは、それをどのように理解すればよいのか？本講義では、これらの問題に関して考えていく。また、企業が今のような姿に至った歴史的経緯についても、現代企業論の前史として論じる。歴史を理解することは、これからの企業のあり方を考えるためにも有益と考えられるからである。		
〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつくか〕 ・本学部で学ぶ専門科目の内容の非常に大きな部分が、企業活動を題材にしている、と言ってもよいだろう。したがって、「現代企業論」は、これから学んでいく事柄が盛られていく「器」の性質を理解するための科目である、と言ってもよい。あるいは、以後の学修のための舞台を整えるためのものとも言えるだろう。 ・〔科目の概要〕で述べたように、企業活動のあり方によって、私たちの生活が左右されているというのが現在の姿である。したがって、現代企業についてしっかりとイメージを確立することは、その活動に翻弄されることなく、しっかりと向き合ったうえで、これからの私たちの生活を設計する第一歩ともなる。このことは、大学生である皆に引きつけられ、次のようにも言えるだろう。すなわち、皆の多くは、卒業後、その進路を企業で働くことに求めていると思う。その企業がどのようなものであるかを知ることは、これからのより良いキャリア形成にも役立つだろう、ということである。		
〔科目の到達目標(最終目標・中間目標)〕 ・企業が現在の形をとるようになった経緯を理解したうえで、現代企業の姿と、その活動(日々の動き)を理解するためのいくつかのアプローチ(接近方法)を獲得することが、さしあたりの目標である。 ・上で獲得した現代企業を見るための見方に基づいて、企業活動にともなって現実に生じている様々な問題を自分なりに考えられるようになることが、中間的な目標と言えるだろう。 ・私たちの生活にとって、これからはどのような企業活動が望まれるか、各自なりの考えを説得的に述べられるようになることが、最終的なねらいである。		
〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕 ・この科目を本学で担当して12年目となる。これまでの「授業アンケート」結果への応答は、学内で見られるようになっているので、関心のある履修者は閲覧してほしい。 ・「改善・工夫」に関連して、アンケートの「自由記述欄」への応答の一部を再録しておく。「説明がわかりやすい」、「板書がみやすい」という意見が、例年それなりの数で見られるが、ここ数年、少数ではあるが、「現代企業に状況に関して、いろいろな観点から学べる」という趣旨の意見があった。現代の企業を複数の角度から眺めて、総合的に見るような講義を心がけたい。また、昨年度は、これも少数(2件)ながら、「教科書がほしい」という意見があった。前述のように、「複数の角度から総合的に見る」という講義の性格上、講義内容全体を包括する1冊の教科書が見いだしがたい、というのが実情である。参考書等は、できるかぎり、講義内で紹介したいと思う。		
〔教科書〕 ノート講義形式。必要に応じて、資料を配付する予定。		
〔指定図書〕 必要なときに指示する。		

〔参考書〕 必要なときに示す。	
〔前提科目〕 なし。	
〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等) ・学期末に定期試験を行う。 ・原則として、中間レポートを課す。 ・以上の要素を最終評価にどのように反映させるかについては、「中間レポート」の提出要領の発表時に通知する。	
〔評価の基準及びスケール〕 ・スケールは、「学生便覧」の「成績評価」の通りである。 ・高い評価を得るためには、要求された課題(試験であれば、設問)に対して、講義した内容にそって、もれなく、かつ理路整然とした理解が示されている必要がある。講義内容を消化した上で、自分自身の考えを展開できている場合は、プラスアルファ(加点要素)となる。	
〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕 この科目に限らないこととは思うが、大学での学修は、授業内容を知識として「覚えていく」のではなく、授業内容自体を、「自ら考えていく」ための材料として、考える力を身につけ、伸ばしていくことを目的としていると言えるだろう。その目的の達成につながるように、すなわち考える材料としての「現代企業論」になるような授業を行っていきたい。多人数の講義形式になると思うが、できる限り質疑応答も交えて、双方向のコミュニケーションができるように心がけるので、受け身の受講態度ではなく、積極的に授業に出席・参加してほしい。	
〔実務経歴〕 なし。	
授 業 ス ケ ジ ュ ー ル	
第1回	テーマ(何を学ぶか)： 「企業」がたどってきた道 内 容： 現代企業の多くが「会社」という形をとっている。この意味について、歴史的な展開を簡潔に振り返りながら理解する。 教科書・指定図書： ノート講義
第2回	テーマ(何を学ぶか)： 現代企業の特徴を理解するための考え方 内 容： 大規模な株式会社形態をとっている現代企業の特徴を理解するための考え方について論じる。 教科書・指定図書： ノート講義
第3回	テーマ(何を学ぶか)： 法的な面から見た企業(1) 内 容： 「会社法Ⅰ・Ⅱ」でより詳しく学ぶことになる企業の法的な要件(法的には企業はどのように成立し、運営されることになっているか)についての概略を見る。 教科書・指定図書： ノート講義
第4回	テーマ(何を学ぶか)： 法的な面から見た現代企業(2) 内 容： 大規模な株式会社は、法的にはどのような仕組みになっているのかについて理解する。 教科書・指定図書： ノート講義
第5回	テーマ(何を学ぶか)： 法的な面から見た現代企業(3) 内 容： 前回に引き続き、大規模な株式会社の法的な仕組みについて理解する。 教科書・指定図書： ノート講義

第6回	テーマ(何を学ぶか): 経済的(貨幣的)な面から見た現代企業(1) 内 容: 会計学関連の科目で詳しく学ぶことになる企業の側面について、その概略を論じる。実際の企業の財務諸表を見ながら、その数字をおおよそどのように読みとるべきか、考える。 教科書・指定図書: ノート講義、配付資料
第7回	テーマ(何を学ぶか): 経済的(貨幣的)な面から見た現代企業(2) 内 容: 前回の継続 教科書・指定図書: ノート講義、配付資料
第8回	テーマ(何を学ぶか): 経済的(貨幣的)な面から見た現代企業(3) 内 容: 前回の継続 教科書・指定図書: ノート講義、配付資料
第9回	テーマ(何を学ぶか): 現代企業の活動にともなう諸問題—法的な問題から— 内 容: 企業の巨大化は、それをどのようにコントロールするか、という問題を引き起こした。「コーポレート・ガバナンス問題」と専門的には言われている問題について概略を論じる。 教科書・指定図書: ノート講義
第10回	テーマ(何を学ぶか): 現代企業と市場主義 内 容: 株式市場での評価に基づいて、企業の価値を計るという考え方は、現代企業の活動にさまざまなひずみをもたらした。この側面について論じる。 教科書・指定図書: ノート講義
第11回	テーマ(何を学ぶか): 株主中心の企業からステークホルダー中心の企業へ 内 容: 前回で見た企業活動のひずみを是正するために、企業は株主のみならず、さまざまなステークホルダー(利害関係者)のためのものである、という考え方が提唱された。これについて検討する。 教科書・指定図書: ノート講義
第12回	テーマ(何を学ぶか): 現代企業を理解するための別の考え方 内 容: 現代企業は、その巨大な社会への影響力を考え合わせると、どのように理解するのが望ましいだろうか。考えてみる。 教科書・指定図書: ノート講義
第13回	テーマ(何を学ぶか): 実際の資料から現代企業を見る(1) 内 容: 『有価証券報告書』等の実際の資料に見られる現代企業の姿を、これまでの授業内容とも照らしながら検討する。 教科書・指定図書: 配付資料
第14回	テーマ(何を学ぶか): 実際の資料から現代企業を見る(2) 内 容: 前回の継続 教科書・指定図書: 配付資料
第15回	テーマ(何を学ぶか): 実際の資料から現代企業を見る(3) 内 容: 前回の継続 教科書・指定図書: 配付資料
試 験	